

JIS

システム及びソフトウェア技術－ ソフトウェア及びシステム開発における 作業生産物のレビューツールの能力

JIS X 23396 : 2022

(ISO/IEC 23396 : 2020)

(JSA)

令和 4 年 8 月 22 日 制定

認定産業標準作成機関 作成・審議

(日本規格協会 発行)

一般財団法人日本規格協会 情報分野産業標準作成委員会 構成表

	氏名	所属
(委員長)	渡 邊 創	国立研究開発法人産業技術総合研究所
(委員)	安 形 輝	亜細亜大学
	石 井 正 悟	独立行政法人情報処理推進機構
	伊 藤 雅 樹	株式会社日立製作所
	菊 川 裕 幸	一般社団法人日本情報システム・ユーザー協会
	寺 田 真 敏	東京電機大学
	中 上 直 子	公益社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサル タント・相談員協会
	仲 谷 文 雄	一般社団法人ビジネス機械・情報システム産業協会
	福 田 昭 一	富士通株式会社
	山 口 大 輔	総務省国際戦略局

主 務 大 臣：経済産業大臣 制定：令和 4.8.22

担 当 部 署：経済産業省産業技術環境局 国際電気標準課
(〒100-8901 東京都千代田区霞が関 1-3-1)

官 報 掲 載 日：令和 4.8.22

認定産業標準作成機関：一般財団法人日本規格協会
(〒105-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル)

素 案 作 成 者：一般社団法人情報処理学会
(〒105-0011 東京都港区芝公園 3-5-8 機械振興会館)

審 議 委 員 会：情報分野産業標準作成委員会 (委員長 渡邊 創)

この規格についての意見又は質問は、上記認定産業標準作成機関又は素案作成者にご連絡ください。

なお、日本産業規格は、産業標準化法の規定によって、少なくとも5年を経過する日までに見直しが行われ速やかに確認、改正又は廃止されます。

目 次

	ページ
序文	1
1 適用範囲	2
2 引用規格	2
3 用語及び定義	2
4 レビューツールのオブジェクトモデル	3
4.1 オブジェクトモデルの概要	3
4.2 レビューエンティティのオブジェクトモデル	3
4.3 レビューツールの能力の種類	4
5 レビューツールのエンティティ	6
5.1 概要	6
5.2 ReviewFolder	6
5.3 Review	6
5.4 Member	7
5.5 WorkProduct	7
5.6 IssueByReview	8
5.7 PlaceOfIssueByReview	8
6 レビューツールの能力	8
6.1 概要	8
6.2 運用管理	9
6.3 IssueByReview の管理	11
6.4 レビューメトリクスの収集及び報告書の出力	13
6.5 メンバ間の情報共有の支援	13
6.6 他のツールとの連携	14
附属書 A (参考) レビューツールのエンティティ及び属性	16
附属書 B (参考) レビューツールのエンティティの CRUD 表	19
附属書 C (参考) レビューツールの能力及びレビューのアクティビティ	20
附属書 D (参考) レビューツールの適用範囲	22
附属書 E (参考) この規格を ISO/IEC 20741 とともに使用する方法	23
附属書 F (参考) レビューツールのユースケース	24
参考文献	31
解 説	32

まえがき

この規格は、産業標準化法第 14 条第 1 項の規定に基づき、認定産業標準作成機関である一般財団法人日本規格協会（JSA）から、産業標準の案を添えて日本産業規格を制定すべきとの申出があり、経済産業大臣が制定した日本産業規格である。

この規格は、著作権法で保護対象となっている著作物である。

この規格の一部が、特許権、出願公開後の特許出願又は実用新案権に抵触する可能性があることに注意を喚起する。経済産業大臣は、このような特許権、出願公開後の特許出願及び実用新案権に関わる確認について、責任はもたない。

システム及びソフトウェア技術— ソフトウェア及びシステム開発における作業生産物 のレビューツールの能力

Systems and software engineering—Capabilities of review tools

序文

この規格は、2020年に第1版として発行された **ISO/IEC 23396** を基に、技術的内容及び構成を変更することなく作成した日本産業規格である。

ほとんど全てのソフトウェア開発組織では、適切なコストでソフトウェアの品質を改善する必要があり、レビューは一つの重要な手段であることが広く認識されている。ライフサイクルの早い段階でレビューを適用すると、通常のプロジェクトで不要なやり直し作業の量を減らせることが知られている。これは、上流工程での問題検出が、下流工程でのテスト実行による問題検出よりもコストがかからないためである。このようにレビューを行うことで、問題を早期に発見し、代替案を評価し、組織的及び個人的なプロセスを改善し、作業成果を改善することが可能である。**JIS X 20246** は、作業生産物レビューの標準プロセスを規定している。

レビュー支援ツールは、レビュー作業を改善し、レビュー品質を改善する能力を提供する。例えば、レビュー間の協力及び情報共有の支援、作業生産物に対するコメントの記録及び強調、レビュー報告書の生成支援などである。

レビューで指摘する項目の数が1 000を超える大規模な開発プロジェクトでは、支援ツールが不可欠である。支援ツールは、レビューの品質及び効率を向上させるために、中小規模のプロジェクトでも積極的に使用されている。実際、様々な種類の“レビューツール”が提供されている。比較的単純な例として、ドキュメント作成のマクロを使用して付箋としてコメントを追加する能力がある。一方、大規模な開発では、プロジェクト全体の進捗管理を支援するツールがあり、数十人のレビューが要検討事項を指摘し、プロジェクト管理者がレビューの実施状況を監視している。

大規模な組織では、様々な種類のレビューツールから適切なツールを選定することが非常に重要である。選定されたツールは、高度な公平性を備え、公共の規格に従って評価されていることが不可欠である。この目的のために、ソフトウェアエンジニアリングツールの評価及び選定のプロセスの指針として、**ISO/IEC 20741** が2017年に公開された。ただし、**ISO/IEC 20741** は、特定のツール分野に依存せずに一般化されているため、レビューに固有の標準能力を規定していない。

この規格は、レビュー支援ツールの能力を定義し、**ISO/IEC 20741** と組み合わせて適切なツールを選定することを目的としている（**附属書 E** 参照）。この規格で想定しているレビュー支援ツールは、**JIS X 20246** で規定しているプロセス全体を支援する。例えば、成果物の表示及び指摘のような個人的な活動を支援する能力、状況の報告のようなグループ活動を支援する能力が必要である（**附属書 D** 参照）。**ISO/IEC 30130**